

カール・フィリップ・モーリッツ 「美の造形的模倣について」

ブラウンシュヴァイク、1788年

渡 部 重 美

解題

本稿は、ゲーテ『イタリア紀行』「第二次ローマ滞在」の1788年「報告3月」に挿入された、モーリッツ（Karl Philipp Moritz, 1756-1793）の美学論文抜粋の試訳である。この論文は、自分との「会話がきっかけで生れたもの」だとゲーテ自身も言っているように、彼の自然観、そして芸術観にとっても近い内容となっている。筆者は、この自然観、芸術観がイタリア旅行中の、特にシチリア旅行における見聞や体験等を通じて形成されたものであると考えており、ゲーテにとってのシチリア旅行の重要性を証言する一資料としてここに翻訳を試みる次第である。

翻訳に入る前に、ミュンヘン版ゲーテ全集の注釈¹⁾を要約する形で、この美学論文を理解するためのポイントをまとめておきたい。

<この論文の執筆経緯と、『イタリア紀行』に収録されるまで>

モーリッツがこの論文を書いたのは、1788年春、ローマにおいてである。多額の前払い金を受け取っていたカンペ（Joachim Heinrich Campe, 1746-1818）の督促を受けて全紙のまま原稿を送付し、1788年秋、ブラウンシュヴァ

1) Johann Wolfgang Goethe: Italienische Reise. Münchner Ausgabe, Bd. 15. Hrsg. von A. Beyer und N. Miller in Zusammenarbeit mit Chr. Thoenes. München (Carl Hanser Verlag) 1992, S. 1199-1200.

イクでカンペの出版社から初版が刊行されたもののまったく反響がなく、すぐに廃棄されてしまった。

ゲーテはこの論文について、『イタリア紀行』に収録する前に、ヴィーラントが主催する雑誌「ドイツのメルクーア (Teutsche Merkur)」で報告していた。『イタリア紀行』に収録されたのは、初版のほぼ1/4程度である。

<論文の内容に関連して>

モーリッツは、1785年にすでに短い論文の中で、「自律的かつ固有の法則にしたがう全体としての芸術作品 (das Kunstwerk als autonomes, eigengesetzliches Ganzes)」について論じている。彼によれば、芸術的創造 (künstlerische Schöpfung) は産出する自然 (produzierende Natur) 同様に特定の目的や実用性から解放されており (Zweckfreiheit)、表現の充溢 (Ausdrucksfülle) を特徴としている。そして、完成した芸術作品 (Kunstwerk) は、自然の偉大な全体 (das große Ganze der Natur) を圧縮した縮小モデル (ein verkleinertes Modell) であり、自然の偉大なる全体の各部分が芸術作品全体の中に自己目的的に、自己完結した形で反映されている。

芸術作品の有用性 (Nützlichkeit des Kunstwerks) を重視していた啓蒙主義の美学に対して、モーリッツの美学は芸術作品の自己目的性 (Selbstzweck des Kunstwerks) を重視しており、ゲーテとシラーはこのモーリッツの美学から決定的な刺激を受けて、ヴァイマール古典主義期の自律美学 (Autonomieästhetik) を確立した。

<重要概念>

この美学論文で重要となる「活動力 (Tatkraft)」は、モーリッツの天才概念 (Geniebegriff)、およびライプニッツの単子論 (Monadenzonzeption / Monadologie) に由来するものであり、この活動力が活発化することによって、人間の創造は神の創造を反映するものとなる。つまり、芸術的創造行為は自然の産出行為を映し出すものとなるのである。芸術的造形力 (künstlerische

Bildungskraft) と感受能力 (Empfindungsvermögen) はともにこの活動力に基礎を置き、この活動力はまた創造する力としても破壊する力としても (die sowohl als schaffende wie zerstörerische Macht) 働く。

翻訳²⁾

このタイトルで、全紙4枚程度の小冊子が印刷された。その原稿をモーリッツがドイツへ送ったのは、イタリア旅行記を書くに約束して前借りをした出版業者を、いくらかでも安心させるためであった。もちろん、そうしたイタリア旅行記を書き記すのは、波乱万丈のイギリス徒歩旅行記を書くほど容易いことではなかった。

しかし、上述の小冊子については、触れないでおくわけには行かない。それは、私たちの会話がきっかけで生れたもので、これをモーリッツが彼なりのやり方で利用し、形にしたものである。事情がどうあれ、この小冊子が歴史的に見て多少とも重要であると言えるのは、当時私たちの前にどのような思想が開けていたかをそこから見て取ることができるからである。この思想はその後成熟し、吟味され、応用されて広まり、その世紀の考え方とうまく一致したのである。

この小冊子に述べられていることを、中心部分から数ページ分ここに挿入しておきたい。これがきっかけとなって、ひょっとしたら全文を再び印刷することになるかも知れないからである。

2) テキストは Johann Wolfgang Goethe: Italienische Reise. Mit Zeichnungen des Autors herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Chr. Michel. 24. Aufl. Berlin (Insel) 2013, S. 705-714 を用い、上記ミュンヘン版全集の注釈、フランクフルト版全集の注釈 (Johann Wolfgang Goethe: Italienische Reise. Teil 2. Hrsg. von Chr. Michel und H.-G. Dewitz. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag im Taschenbuch, Band 48) 2011, 1442-1443)、相良守峯訳『イタリア紀行 (下)』岩波文庫、高木久雄訳「第二次ローマ滞在」(『ゲーテ全集 11 紀行』潮出版、285-461 ページ)、鈴木芳子訳『イタリア紀行 (下)』光文社古典新訳文庫の訳文および訳注を参考にした。また、必要に応じて Goethe-Wörterbuch, digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Version 01/23 (<https://www.woerterbuchnetz.de/GWB>) を参照した。

「しかし、造形芸術の天才の場合、その活動力が及ぶ範囲は自然そのものと同程度でなければいけない。つまり、その機構はとてつとて繊細に組織されていなければならないし、また、すべてを包み込んで流れる自然と果てしなく多くの接触点を持ち、いわば自然の中に大規模に見られるあらゆる関係が末端に至るまでその機構の中に小規模に並存しつつ、お互いに排除し合わない程度に余地が残っていなければならないのである。

さて、このようにより繊細に組織された一つの機構が、完全に発達を遂げて、突然自らの活動力をほんやりと予感しつつ、これまで目でも耳でも、想像力でも思考力でも捕えられなかった一つの全体を把握するようになると、揺れ動く諸力の間に必然的に不安定、不均衡が生じて、これら諸力が再びバランスを保つまで続くことになる。

ある精神の、もっぱら活動に励む力が、すでに自然の高貴で偉大な全体をほんやりとした予感の中で捕えている場合には、明確に認識する思考力、さらに生き生きと描写する想像力、この上なくはっきりと映し出す外的感覚は、個別の対象を自然と関連づけて考察することにもはや飽き足りなくなってくる。

活動力の中でただほんやりと予感された、その偉大な全体の関係はすべて、必然的になんらかのやり方で目に見えるようになったり、耳で聞こえるようになったり、あるいはまた、想像力によって捕えられるようにならなければいけない。これらの諸関係は活動力の中に眠っているので、そうなるためには、この活動力がそれらを自己自身にしたがって、自己自身の中から形成しなければならないのだ。——活動力は、偉大な全体のあらゆる関係を、また、これら諸関係の中に最高の美を、その美が放つ光線の先端部分を手がかりにして一つの焦点を探るようなやり方で捕えなければならない。——この焦点から、目が測定したサイズに応じて、最高の美のしなやかにして忠実な像が仕上げられなければならない。しかもこの像は、自然の偉大な全体が持つ最も完全な関係を、自然そのものとまったく同じように本来の姿で正しく、その小さなひろがりの中に捕えていなければならないのだ。

しかし、この最高の美の複製は必ず何かに付着していなければならないた

め、造形的な力はその個性によって規定されつつ、何か目に見えたり、耳に聞こえたり、あるいは想像力によって捕えられるような対象を選び、これに最高の美の写し絵を縮尺して転写することになる。——この対象がまた、実際に自ら表現している通りのものであるならば、本当に自主独立的な全体を自分自身以外には一切許容しない自然と、もはやこれ以上関係を続けるわけには行かなくなるので、私たちはすでにかつて置かれていた地点へと連れ戻されることになる。つまり、内的本質は、芸術を通してそれ自身で存立する全体へと形成され、自然の偉大な全体が持つ諸関係を妨げられることなくそれ自身の完全なひろがりの中で映し出すことができるようになるまでは、いつもまずは現象に姿を変えなければならない、という点である。

さてしかし、その偉大な諸関係の完全なひろがりの中にこそ美が存在するのだが、こうした諸関係はもはや思考力の領域には帰属しないものなので、美の造形的模倣という生き生きとした観念もまた、美を生み出す活動力の感覚のうちのみ、しかも、作品が生まれ出る最初の瞬間にのみ生じうるものなのである。その瞬間に作品は、すでに完成されたものとして、それがしだいに生成してくるあらゆる段階を踏んで、ぼんやりとした予感のうちに突然意識されるようになる。そして、作品はこの最初の生成の瞬間に、言ってみれば実際に存在する以前にすでに存在しているのである。これによってまた、創造する天才を絶え間ない形成へと駆り立てる、あの名状しがたい魅力も生まれるのだ。

美の造形的模倣に関するこの考察は、美しい芸術作品の純粋な享受そのものと一致するものであり、この考察を通して、美しい芸術作品の享受を増してくれるような、あの生き生きとした観念に近い何か私たちに生じる可能性がある。——しかし、私たちが美を最高度に享受したとしても、私たち自身の力に基づく美の生成を完全には一緒に捕えきることはできないので、美の唯一最高の享受はつねに、美を生み出す創造的天才自身のものに留まることになる。美はそれゆえ、その最高の目的を、生み出され生成する中ですでに達成してしまっているのである。私たちが美をあとから享受するのは、美がすでに存在している結果に過ぎない。——それゆえ造形的天才は、自然の偉大な計画の

中で、まずは自分自身のために、それからようやく私たちのために存在することになる。そうした天才の他にも、自ら創造し形成したりはしないものの、いったん生み出された形成物を想像力によって包括的に捕えることができる人間が存在するからである。

その内的本質が思考力のらち外にあり、その発生のうちに、それ自身の生成のうちにあるという点こそまさしく、美の本性なのである。思考力が美に面と向かったときに、どうしてそれが美しいのかもはや問うことができないからこそ、それは美しいのである。——というのも、美を判断し考察しうるための基準となるような比較点が、思考力にはまったく欠けているからである。生粋の美に対しては、思考力では包括的に捕えることのできない、自然の偉大なる全体が織りなすあらゆる調和的諸関係の総体と比較する以外に、他にどんな比較点があるだろうか？自然のあちらこちらに散らばっている個々の美はどれも、この偉大なる全体としてのあらゆる諸関係の総体が、程度の差こそあれその中に姿を現している限りにおいてのみ美しいのである。したがって、このような個々の美は、造形芸術の美をはかるための比較点としては決して役立たないし、また、美の真なる模倣のための手本にもなりえないのである。なぜなら、自然の個々の対象に見られる最高の美ですら、自然の一切を包括する全体の、偉大かつ荘厳な諸関係を堂々と模倣しようと思ったら、やはりまだ十分に美しいとは言えないからである。美とはそれゆえ認識されうるものではなく、生み出されるか、あるいは、感じ取られなければならないものである。

というのも、比較点がまったく欠けているために美は思考力の対象とはならないので、自分で美を生み出すことができない限り、私たちはこれを楽しむこともすっかり諦めなければならないだろう。私たちが何か基準になるものを拠り所として、これにより近いかどうかで美の度合いをはかることが決してできないならば、の話だが。——言い方を変えれば、私たちの内部にある生み出す力そのものではないにしろ、この力と可能な限り等しい何かが生み出す力の代わりをすることがなければ、ということである。この何かこそ、私たちが美に対する趣味とか感受能力と呼んでいるものである。この感受能力は、その限

界内に留まっている場合には、美が生み出される際のより高次の享受が欠如していても、静かな観察の邪魔されることのない平静さによってこの欠如を埋め合わせることができるのである。

つまり、器官が十分繊細に組織されていないがために、流れ込んでくる自然の全体に対して、その偉大な諸関係をすべて小規模にはあるがもれなく映し出すのに必要なだけの接触点を持たず、私たちにはなお円を完全に閉じるための一点が欠けている場合には、私たちは造形力の代わりに美に対する感受能力のみを持つことができるのである。美を私たちの外部に再現しようとする試みはどれも失敗に終わるだろうし、美に対する私たちの感受能力が私たちに欠如している造形力に隣接していればいるほど、いっそう私たち自身に対する不満を募らせることになるだろう。

すなわち、美の本質はそれ自身において自己完結している点にこそあるのだから、最後の一点が欠けているだけでも無数の点が欠けているのと同じくらいに美を損なうのである。なぜなら、この欠けている最後の一点が、他のあらゆる点を本来置かれるべき場所からずらし、位置を狂わせてしまうためである。——そして、完成に至るこの点をいったん逸してしまうと、芸術作品は着手したときの苦労や出来上る過程で要した時間に見合うものではなくなってしまふ。稚拙なものを通り越して無益なものにまで価値を落とすことになり、その存在は必然的に忘却の中に葬り去られ、再び廃棄されねばならないのだ。

同じように、美を完成するための最後の一点が欠けていると、より繊細に組織された機構に植えつけられた造形力をも、無数の点を欠いているのと同じくらい損なうことになる。——この能力が感受能力として持ちうる最高の価値でさえ、それを造形力として見た場合、最低の価値と同じくらいのもんとしてしか見られない。感受能力がその限界を踏み越えた場合には、これは必然的に自己自身以下のものに成り下がり、廃棄され、根絶されてしまうのである。

ある種類の美に対して感受能力が完全なものとなればなるほど、この能力は勘違いをして、自分を造形力だと思い込み、こうして数々の試みに失敗して自身との折り合いが悪くなる危険がますます高まってくる。

例えば感受能力は、何かある芸術作品に含まれる美を享受する際に、同時にその生成過程を通して、この作品を創造した造形力を見極める。そして、自らこのような美を生み出すほどに力強いこの造形力を感じつつ、ほんやりとではあるが、まさしくこの美より高次のレベルでの享受を予感するのである。

すでに存在している作品に対して味わうことのできない、このより高次のレベルでの享受をなんとか手に入れようとして、ひとたびあまりにも活性化され過ぎた感受能力は、何か似たようなものを自分でも生み出そうと努力するものの徒労に終わり、自分の作品を嫌い、これを投げ捨てる。と同時に、すでに自己の外部に存在していて、まさしく自分が関与することなしに存在しているがゆえに何ら喜びを見出すことのできないような、あらゆる美の享受を、厭わしく思うようになる。

この感受能力の唯一の望みと努力は、ただほんやりと予感するだけの、自分には拒まれていたより高次の享受に与ることである。つまり、自らのおかげで存在している美しい作品の中に、自身の造形力を意識しつつ自分自身を映し出すことである。――

しかし、この感受能力の願いは永遠に満たされることがない。この願いを生み出したのが私利私欲だからであり、美というものはただそれ自身のためだけに芸術家の手によって捕えられ、自発的かつ従順に芸術家によって形成されるものだからである。

ところで、創造しようとする造形衝動の中にすぐさま、美が完成した暁に与えてもらえるはずの、美の享受に関する観念が混じり込む場合、そしてまた、私たちの活動力が、着手しようとしているものへと自己自身の中で、自己自身を通して駆り立てられていると感じることなく、上述の観念がこの活動力の第一の、最も強い動因となっている場合には、この造形衝動は確かに純粹なものとは言えない。美の焦点、あるいは美が完成する点は、作品そのものを越えてこぼれ落ち、その効果の方へ移ってしまう。光線は分散してしまい、作品はそれ自身で完結して完成に至ることができなくなってしまふ。

自己自身から生み出された美の最高度の享受にこれほど近づいていると思ひ

つつ、しかしこれを諦めるというのは、もちろん過酷な戦いのように思える。——この戦いはそれでも、次のような場合にはきわめて楽なものとなる。つまり、私たちがとにかく所有していると自負するこの造形衝動から、その実体を純粹なものにするために、いまだ目につく私利私欲のどのような痕跡をも除去し、そしてまた、私たちが生み出そうとしている美が実際に完成した暁には、私たち自身の造形力の感覚を通して与えられるはずの、あの享受に関するどのような観念をもできる限り追い払おうとし、結局のところ息をひきとる最後の瞬間によりやく完成できるのだとしても、それでもなおこの作業の完成に向けて努力する場合には、この戦いは容易なものとなるのである。——

それから、私たちの予感する美がただそれ自体として、それが生み出される際に、私たちの活動力を動かすに足る十分な魅力を持ち続けているならば、私たちは安心して自らの造形衝動にしたがってよいだろう。この衝動はまぎれもない純粹なものだからである。——

しかし、享受や効果をすっかり無視することで魅力も失われてしまうならば、これ以上戦う必要はなく、私たちの心の中の平和も回復される。そして、今や再び自分を取り戻した感受能力には、自らの限界内に謙虚に後退したことに対する報酬として、美の最も純粹な享受が開かれるのである。この享受は、感受能力のありのままの本質と両立しうるのである。

もちろん、造形力と感受能力が交差する点はじつに簡単に間違えられ、踏み越えられるので、誤った造形衝動によって、最高の美の純正な模写ひとつに対して、偽の、不当な模写が山ほど芸術作品において生じてしまうのは、何ら不思議なことではない。

理由は次の通りである。純正な造形力は、その作品が生まれる最初の瞬間にただちに、作品の最初にして最高の享受を自身に対する確かな報酬として自分自身の中に持っており、また、その動因のいちばん最初の瞬間を、享受の予感ではなく自分自身を通して、その作品から受け取ることによってのみ偽の造形衝動から区別されるのであり、さらにまた、このように情熱が優る瞬間には、思考力自体は何ら正しい判断を下すことができないのだから、何度も試みては

失敗を繰り返すことなしにこのような自己欺瞞から逃れることはほとんど不可能なのである。

そして、このように失敗に終わった試みでさえ、必ずしも造形力欠如の証明とはならない。造形力は、それが純正なものであっても、眼前に示すべきものを想像力の前に置こうとしたり、耳で聞くべきものを眼前に提示しようとしたりして、しばしばまったく間違った方向を取ることがあるからである。

自然は、生まれつき備わっている造形力を必ずしも完全に成熟させたり発育させるわけではなく、あるいは、造形力がまったく発育できないような誤った道を取らせることもあるので、生粋の美はまれにしか生じない。

また自然は、思い上った造形衝動が低俗で劣悪なものを生じさせるのを妨げないので、まさにそれゆえに、真に美しく高貴なものは、その希少価値によって劣悪かつ低俗なものから区別されるのである。――

感受能力にはしたがって、造形力の成果によってのみ充填される隙間が残ることになる。――造形力と感受能力は、お互いに男女のような関係にある。というのも、造形力もまたその作品が生まれる最初の段階の、最高度の享受の瞬間には同時に感受能力であり、自然と同じように、自己の本質の模写を自分自身から生み出すからである。

したがって、感受能力も造形力もともに、機構がそのすべての接点において、自然の偉大な全体の諸関係を完全に、あるいはほぼ完全に模写している限りで、この機構のより繊細な組織の中に基礎づけられる。

感受能力も造形力も、思考力よりは包括的である。そして、この二つの能力が基礎を置く活動力は同時にまた、思考力が捕えるものすべてを捕える。なぜなら、この活動力は、私たちがいずれ持つことができるあらゆる概念の最初のきっかけを、絶えず自分自身から紡ぎ出しつつ、自己の中に担っているからである。

さて、このような活動力は、思考力の範疇に収まらないすべてのものを生み出しつつ自己の中に捕えている限りで、造形力と呼ばれる。一方で、この活動力は、思考力のらち外にあるものを、生み出そうと努力しつつ自らのうちに包

含する限りで、感受能力と呼ばれるのである。

造形力は、感受性と活動力なしにそれ自身だけでは存在しえない。これに反して、純然たる活動力は、本来の感受能力および造形力なしでもそれ自身だけで存在しうるものであり、この両能力の基礎に過ぎない。

さて、この単なる活動力が同様に、機構のより繊細な組織の中に基礎を置く限り、器官は、おおよそそれが持つすべての接触点においてのみ、偉大な全体の諸関係の模写となりうる。その際、感受能力と造形力が前提とする完全性の度合いは、とりたてて要求されることはないだろう。

つまり、私たちを取りまく偉大な全体の諸関係のうちの、こんなにも多くのものがつねに私たちの器官のあらゆる接触点において併存するので、私たちは、自身がこの偉大な全体であるわけではないのだが、これをほんやりと自分自身の中に感じるのである。私たちの本質の中に編み込まれたこの全体の諸関係は、四方八方へ再び広がって行こうと努める。器官は、四方八方へと無限に拡張して行きたいと願い、私たちを取りまく全体を自己自身の中に映し出すだけでなく、可能な限り自らがこの全体になろうとするのである。

それゆえ、より高次の機構はどれも、その本性にしたがって、自分より下位の機構を捕まえて自己の本質の中に取り込む。植物は、単なる生成と成長を通して無機物を摂取し、動物は、生成、成長と飲食を通して植物を摂取する。人間は、生成、成長と飲食を通して動物や植物を自己の内的本質に変えてしまうだけでなく、同時に、自分の機構より下位にあるものすべてを、自己の本質のもっと明るく磨き抜かれた、映し出す表面を通して、自身の生存の範囲内につかみ取る。そして、自らの器官が自己形成のプロセスを経て自己完結すると、つかみ取ったすべてのものをより美しい形で自己の外部に再現するのである。

そうでなければ人間は、自分の周囲にあるものを破壊して、自己の現実的生存の範囲内に引き入れ、できるかぎり破壊の手を四方八方へ延ばさずにはいられない。というのも人間は、純粹に無邪気に眺めているだけでは、現実的生存を拡張したいという渴望を決して満たすことができないからである。」